

『前言語期の自閉症スペクトラム障害幼児と 保育者の身体接触を伴うコミュニケーションの特徴： 一事例による考察』

A study of the feature of non-verbal communication between a young child with autism spectrum disorder in the prelinguistic period and teachers of kindergarten

篠沢薫 (共立女子大学), 権藤桂子 (共立女子大学), 松井智子 (東京学芸大学)

Kaoru SHINOZAWA, Keiko GONDO, Tomoko MATSUI

1. 問題と目的

本研究では、前言語期の自閉症スペクトラム障害 (ASD) 幼児と保育者の身体接触を伴うコミュニケーションの特徴について、注意共有の有無と関連させて縦断的に検討する。

ASD 幼児と養育者とのコミュニケーションでは、その障害特性から養育者の側がかかわりにくさを感じることが多い。特に前言語期の段階の幼児は、有意味語の表出がないことに加え、視覚的注意共有が少ないなど非言語コミュニケーションの面でも養育者とその幼児の意図をくみにくいと感ずることが多いだろう。言語を含むコミュニケーション能力はコミュニケーション経験を積むことによって発達が促される。そのため、前言語期のような聞き手効果段階にある ASD 幼児の場合には、情動をくみとってくれる大人の存在は重要である (Bates, 1975)。このことをふまえると、かかわる相手である養育者の側が、日常生活の中で子どもにかかわりにくさを感じた状態にいることは、子どもがコミュニケーション経験を積む機会を阻害する一

つの要因になる可能性もある。よって、前言語期の ASD 幼児に対する養育者の側のかかわり方を検討することは重要である。また、ASD の障害特性 (他者とのコミュニケーション能力の発達に難しさを抱える) という観点からも、幼児のみを対象とするのではなく、その相手 (大人など他者) を含めて検討することが必要である (榎原, 2013)。コミュニケーションを検討する上で、かかわっている当事者を検討するというのは、たとえば定型発達児の親子のコミュニケーションについての研究ではごく当然に行われていることである。しかしながら、ASD 幼児を対象にした研究では、これまで子どもの障害特性に焦点をあてて検討されることが多かったといえる。柳澤 (2015) によると、大人のはたらきかけが自閉症のある幼児に何らかの影響があることを考慮して支援等を展開する必要があるが、このような視点から相互作用について検討した研究は少ないという。

前言語期の ASD 幼児のコミュニケーションについて、前述したような相互作用という観点で検討した研究では、たとえば、ASD 幼児は、

本人の興味や関心に沿った大人からの身体的なかかわりにはよく反応する (Doussard-Roosevelt ら, 2003; 狗巻, 2013) といった知見が得られている。このうち「身体的なかかわり」という点については、ASD ではない他の障害をもつ子どもと大人とのコミュニケーションを検討した研究でも言及されている。

たとえば、前言語期の重度重複障害児との相互交渉における母親の支持的行動を検討した吉川 (2013) によると、玩具等の操作において、身体接触を伴った母親の行動は注意共有の成立に有効であることが示された。また前言語期の ADHD が疑われる聴覚障害幼児にとっても、身体接触を含む非言語コミュニケーションを伴った注意喚起は効果的であると示唆された (森・熊井, 2011)。

このように、先行研究では身体接触や接近を伴う大人のはたらきかけが ASD 児や重度重複障害児とのコミュニケーションにおいて有効であることは明らかにされてきた。しかしながら、身体接触の具体的な内容は検討されていない。具体的な内容とは、たとえば、身体接触自体にどのような意味合いがあるのかといった機能的側面や接触時の位置関係などである。以上より、本研究では、前言語期の ASD 幼児と保育者の身体接触を伴うコミュニケーションに着目し、注意共有の有無と関連させて、一事例を縦断的に検討する。

3. 方法

3-1. 調査の手続き (調査対象, 調査期間など)

幼稚園年長組の幼児 1 名と保育者数名 (ボランティアも含む) であった。対象児は、自閉症の診断を受けており、新版 K 式発達検査の結果は、姿勢運動領域発達指数 71、発達年齢 3 歳 1 ヶ月、認知適応領域発達指数 43、発達年齢 1 歳 10 ヶ月、言語社会領域発達指数 22、発達年齢 0 歳 11 ヶ月であり、全領域発達指数

41、発達年齢 1 歳 9 ヶ月であった。検査時に指さし行動はみられなかった。調査期間を通して、有意味語の表出はなかった。自由遊び場面では、他児と共に遊ぶということはほとんどみられず、園庭を走り回ったり、遊具に上って高いところに立ったりすることをして楽しんでた。保育者が対象児の意図をくみ取ってはたらきかけることが多く、対象児のコミュニケーション能力の発達段階は、聞き手効果段階にある状態と考え、本研究の対象とした。調査期間後半になると、保育者に要求があるときは非言語の手段ではたらきかけることもみられた。

調査期間は、11 ヶ月間計 10 回 (原則毎月 1 回午前中の 2 時間程度) であり、対象児の在籍園においてデジタルビデオカメラを用いて録画した。そのうち、本研究では、9 ヶ月間計 8 回 20 分間、午前中の室内での活動場면을対象とした。場面については、机上での自由遊び場면을原則としたが、保育の流れによっては朝の会などが含まれることもあった。

3-2. 分析方法

分析方法は、対象児もしくは保育者が相手に身体接触を伴ってかかわったコミュニケーション行動を抜粋し、整理した。1 つの場面は、対象児もしくは保育者が相手に身体接触や接近を伴ってかかわった時点を始点とし、その後いずれかが物理的に離れた時点を終点とした。

コーディングの項目は、①視線 (1: かかわっている他者, 2: 対象児か保育者が操作している物, 3: 1 と 2 の両方, 0: そのほか), ②身体接触の機能 (1: 親和的, 2: 否定的, 3: 偶発的, 4: 中立的, 0: 不明), ③身体的位置関係 (1: 接触者は、相手と水平の位置にいる, 2: 接触者は、相手の後ろにいる, 3: 接触者は、相手の前にいる, 0: 1-3 の混合), ④接触部位 (1: 首～頭, 2: 体幹, 3: 上肢・下肢 (肩を含む), 4: 1-3 の混合), ⑤対象児への発話の有無 (1: あり, 2: 不明, 0: なし), ⑥

注意共有（1：相互注視，2：共同注視，0：なし）である。②身体接触の機能については，塚崎・無藤（2004）の分類より，1：親和的とは「親近感，甘えなど」，2：否定的とは「不安，悲しみ，怒り，攻撃など」，3：偶発的とは「無意識，よろけなど」，4：中立的とは「誘導，呼びかけ，説得，介入，なだめなど」，0：不明とは「意味不明など」とした。⑥注意共有については，吉川（2013）の分類を使用した。

3-3. 信頼性

計8回（各回20分間）のうち，身体接触を用いた場面の抜粋およびコーディングについて，全体の20%を第一著者と評定協力が独立して分析した。そのほかの80%は第一著者が単独で分析をした。身体的コミュニケーション場面の抜粋については，単純一致率100%であった。コーディングについての評定者間一致率は，①視線 $\kappa = 0.57$ （単純一致率0.82），②身体接触の機能 $\kappa = 0.63$ （単純一致率0.93），③身体的位置関係 $\kappa = 0.73$ （単純一致率0.88），④接触部位 $\kappa = 0.94$ （単純一致率0.98），⑤対象児への発話の有無 $\kappa = 0.70$ （単純一致率0.91），⑥注意共有 $\kappa = 0.77$ （単純一致率0.95）であった。一致しない箇所については協議した上で修正をした。

4. 結果

4-1. 各調査回にみられた身体接触行動の数

表1は，各調査回（20分間）にみられた身体接触行動の数を示したものである。保育者が始発する身体接触行動の数は各調査回でばらつきがあった。対象児が始発する場合も同様にばらつきがあり，調査開始前半の①～③，⑦回は対象児が始発する身体接触行動は全くなかった。

表1. 各調査回にみられた身体接触行動の数

	保育者始発	対象児始発	計
①	5	0	5
②	32	0	32
③	7	0	7
④	28	7	35
⑤	15	1	16
⑥	24	6	30
⑦	9	0	9
⑧	7	1	8

4-2. 相互交渉における始発者

各調査回にみられた身体接触を伴うコミュニケーションにおいて，対象児と保育者のどちらが身体接触を伴ってコミュニケーションを始発したのかについて，その割合を表したものが図1である。横軸は調査回数である。④回目頃より，対象児から保育者に対する身体接触もわずかながらみられることがあった。

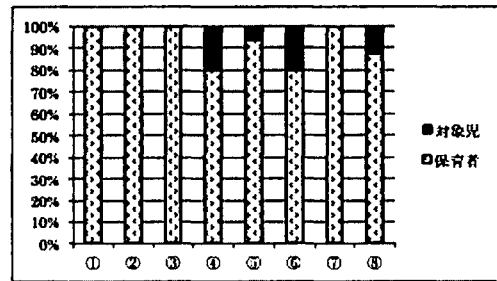


図1. 相互交渉における始発者

4-2. 身体接触における機能

身体接触を伴うコミュニケーションにおいて，保育者から始発したものの機能を分類した。各調査回における各機能の割合を表したものが図2である。横軸は調査回である。調査期間を通して，促しのような「4. 中立的」が多かった。③回目頃より，「1. 親和的」もみられるようになった。「3. 偶発的」は①～③にかけてみられていた。「2. 否定的」なものは全くみられなかった。

対象児から始発したものの機能を分類した結果，身体接触がみられる場合には「1. 親和的」がほとんどであった。④回目については，機能として分類ができない「0. 不明」もみられた。

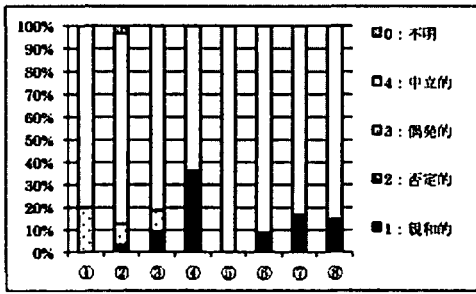


図 2. 保育者から始発した身体接触における機能

4-3. 身体接触時の身体の位置

保育者から始発した身体接触を伴うコミュニケーション（機能面で「3. 偶発的」「0 不明」と分類されたものは除外）において、接触時の接触始発者の身体の位置を分類し、その割合を算出した。図 3 はその結果である。横軸は調査回である。調査期間を通して次第に「3. 接触者は相手より前にいる」割合が増えた。「0.1-3 の混合」は次第にその割合が減った。

対象児から身体接触を始発した際には、そのほとんどが「3. 接触者は相手より前にいる」であった。

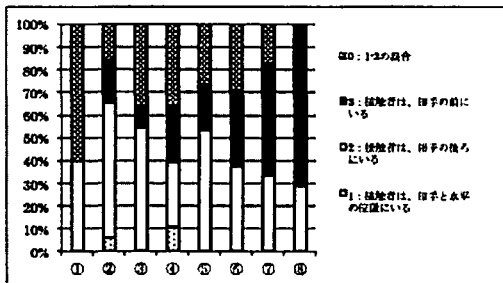


図 3. 保育者から身体接触を始発した際の身体の位置

4-4. 身体接触時の視線の方向

保育者から始発した身体接触を伴うコミュニケーション（機能面で「3. 偶発的」「0 不明」と分類されたものは除外）において、保育者の

視線を分類し、その割合を算出した。図 4 はその結果である。横軸は調査回である。調査期間を通して「1. かかわっている他者」が多かった。また、④回目頃から「3.1 と 2 の両方」もみられるようになった。対象児から身体接触を始発した際は、そのほとんどが「1. かかわっている他者」であった。

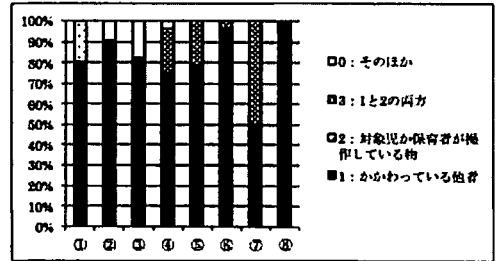


図 4. 保育者から身体接触を始発した際の視線の方向

4-5. 身体接触時の発話の有無

保育者から始発した身体接触を伴うコミュニケーション（機能面で「3. 偶発的」「0 不明」と分類されたものは除外）において、保育者の発話の有無を分析し、その割合を算出した。図 5 はその結果である。横軸は調査回数である。②回目頃より、「1. あり」が次第に増えた。対象児から身体接触を始発した際については、特に一貫した傾向はなく、発声が多くみられる回もあれば、そうではない回もあった。

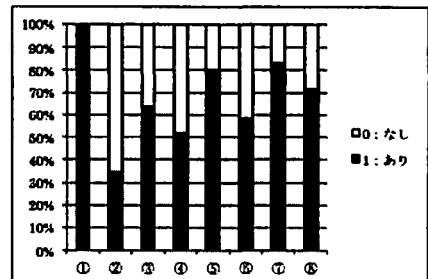


図 5. 保育者から身体接触を始発した際の発話の有無

4-6. 注意共有の有無

保育者から始発した身体接触を伴うコミュニケーション（機能面で「3. 偶発的」「0 不明」と分類されたものは除外）において、注意共有の有無を分析し、その割合を算出した。図6はその結果である。横軸は調査回数である。調査期間を通して特に一貫した傾向はなかったが、④～⑥回目の調査では共同注視がみられ、その後、⑦～⑧回目では再び相互注視のみ生じた。

対象児から始発した場合には、一貫した傾向はなかった。④、⑥回目では、注意共有が多くみられたが、⑤、⑧回目では全くみられなかった。

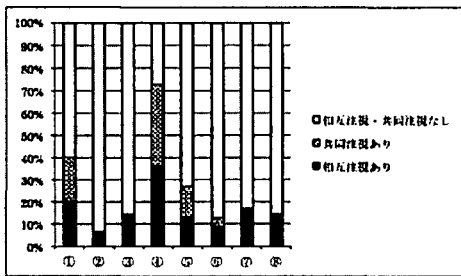


図6. 保育者から身体接触を始発した際の注意共有の有無

4-7. 注意共有が生じた際の身体接触の特徴

保育者から身体接触を始発した際に生じた注意共有に着目し、その際の身体接触の特徴を検討した。調査回については、2回の長期休暇(③④の間、⑥⑦の間)を区切りとして、①～③回目を前期、④～⑥回目を中期、⑦～⑧回目を後期の3つの時期に区分して検討した。その後、この3つの時期それぞれのコーディング項目について、注意共有の有無により区分し検討した。その結果が表2～6である。

視線は、注意共有がある場合には、全時期を通じて全て対象児に向いていた(表2)。身体接触の機能は、特に前期には、注意共有なしの

場合に比べて親和的なものが多かった(表3)。身体の位置は中期以降、対象児の前が多かった(表4)。接触した対象児の身体部位については特に一貫した傾向はなかった(表5)。

発話については、全時期を通じて発話を伴うことが多かった(表6)。

表2. 視線の方向

※ () 内は度数

	注意共有なし				注意共有あり			
	1: かかわっている他者	2: 対象児か保育者が操作している物	3: 1と2の同方	0: その他	1: かかわっている他者	2: 対象児か保育者が操作している物	3: 1と2の同方	0: その他
前期	97.1%(34)	0.0%(0)	0.0%(0)	2.9%(1)	100%(4)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)
中期	91.8%(45)	0.0%(0)	8.1%(3)	2%(1)	100%(3)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)
後期	77.8%(7)	0.0%(0)	22.2%(2)	0.0%(0)	100%(2)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)

表3. 身体接触の機能

※ () 内は度数

	視覚的注意共有なし			視覚的注意共有あり		
	1: 親和的	2: 否定的	4: 中立的	1: 親和的	2: 否定的	4: 中立的
前期	2.8%(1)	0.0%(0)	97.2%(35)	25%(1)	0.0%(0)	75%(3)
中期	20.4%(10)	0.0%(0)	79.5%(39)	12.5%(1)	0.0%(0)	87.5%(7)
後期	11.1%(1)	0.0%(0)	88.9%(9)	50%(1)	0.0%(0)	50%(1)

表4. 身体的位置

※ () 内は度数

	視覚的注意共有なし				視覚的注意共有あり			
	1: 接触者は、相手と水平の位置にいる	2: 接触者は、相手より後ろにいる	3: 接触者は、相手より前にいる	0: 1-3の混合	1: 接触者は、相手と水平の位置にいる	2: 接触者は、相手より後ろにいる	3: 接触者は、相手より前にいる	0: 1-3の混合
前期	4.9%(2)	53.7%(22)	12.2%(5)	29.3%(12)	0.0%(0)	75%(3)	25%(1)	0.0%(0)
中期	5.1%(3)	48.9%(23)	18.3%(8)	30.6%(15)	0.0%(0)	0.0%(0)	82.5%(9)	37.5%(3)
後期	0.0%(0)	44.4%(4)	55.6%(5)	0.0%(0)	0.0%(0)	0.0%(0)	100%(2)	0.0%(0)

表5. 接触した相手の身体部位

※ () 内は度数

	視覚的注意共有なし			視覚的注意共有あり		
	1: 首～顔	2: 体幹	3: 上肢・下肢(両を含む)	1: 首～顔	2: 体幹	3: 上肢・下肢(両を含む)
前期	4.9%(2)	26.8%(11)	41.5%(17)	26.8%(11)	25%(1)	50%(2)
中期	10.2%(5)	24.5%(12)	38.8%(18)	28.5%(13)	0.0%(0)	37.5%(3)
後期	11.1%(1)	11.1%(1)	44.4%(4)	33.3%(3)	0.0%(0)	50%(1)

表6. 発話の有無

※ () 内は度数

	視覚的注意共有なし			視覚的注意共有あり		
	1: あり	2: 不明	0: なし	1: あり	2: 不明	0: なし
前期	41.5%(17)	0%(0)	58.5%(24)	75%(3)	0%(0)	25%(1)
中期	85.1%(27)	2%(1)	42.9%(21)	75%(5)	0%(0)	25%(2)
後期	66.7%(6)	0%(0)	33.3%(3)	100%(2)	0%(0)	0%(0)

5. 考察

5-1. 身体接触を伴うコミュニケーションの特徴

結果より、身体接触を伴うコミュニケーションの特徴が複数挙げられる。まず一点目は、対象児が身体接触を始発することがみられるようになった点である。調査開始頃、身体接触を伴うコミュニケーションを対象児が始発することはなかったが、④回目頃より対象児が始発することもみられるようになった。このことの要因の一つとして、対象児のコミュニケーション能力の発達段階が意図的伝達段階 (Bates,1975) に移行しつつあるからだと考えられるだろう。

二点目は、始発者によって身体接触の特徴が異なっていた点である。対象児による身体接触は、バリエーションが少なく、調査期間を通じた縦断的な変化はなかった。対象児による身体接触で多くみられたものとしては、対象児は接触者の前にいて、相手のいる方向に視線を向け、抱きつきや笑顔で保育者に触れるような親和的な機能をもったものが挙げられる。

一方、保育者による身体接触は、バリエーションが豊富であった。たとえば、調査開始頃は、対象児に何かを促すような中立的な機能をもつ接触が多かったが、親和的な機能をもった接触が増えた。また、保育者自身の身体を対象児の前におくことが次第に増えていった。視線の方向については、④回目頃から、対象児と対象児が操作する物の両方に向くこともみられるようになった。発話についても、調査開始前半よりも後半の方が発話を伴いながら接触することが多いといえる。このように、④回目頃から保育者の身体接触の特徴は変化してきたと考えられる。この④回目というのは、前述したように、対象児のコミュニケーション能力の発達段階が移行したと推測される時期である。

以上より、保育者による身体接触を伴うコミュニケーションは、対象児のコミュニケーション能力の変化に伴い、よく用いる方略に変化が

みられたと考えられる。狗巻 (2013) によると、保育者と ASD 幼児とのかかわりにおいては、対象児の共同注意の発達の变化に応じて、保育者のかかわりに変化が生じたという。本研究でも同様に、ASD 幼児のコミュニケーション能力の変化に応じて、保育者の身体接触を伴うコミュニケーションの特徴にも変化がみられた可能性がある。

本研究では、調査開始頃、保育者は対象児と向かい合うとは限らない位置で、促したり誘導するような機能をもった身体接触が多くみられていたが、対象児と向かい合っ、視線を合わせながら親和的な機能のある身体接触が多くみられるようになったということは確認できた。コミュニケーションな経験をする機会が増えることは、ASD 幼児にとっては、コミュニケーション能力の発達を促す上で非常に重要である。

5-2. 注意共有の有無による保育者の身体接触の特徴

5-1 で述べたように、保育者が始発する身体接触を伴うコミュニケーションの質は、調査期間を通じて変化があった。では、視覚的注意共有の有無と関連させて考察するとどのような相違点があるのだろうか。3つの時期ごとに考察する。

調査①～③回目 (前期) では、対象児のコミュニケーション能力の状況は、聞き手効果段階にあったと考えられる。注意共有の有無による違いとしては、注意共有のある場面の方が、親和的な機能をもった接触であり、身体的位置は前か後ろかのいずれかで、発話が伴うことが多かった。身体が後ろにある場合には、保育者が対象児の顔を覗き込み、視線が合いやすいような動きをしているものもあった。

調査④～⑥回目 (中期) では、対象児のコミュニケーション能力の状況は、意図的伝達段階に移行しつつあったと考えられる。注意共有の有無による違いとしては、機能面では大きな違いはない (中立的な機能が多い) が、注意共有

のある場面の方が身体の位置が対象児の前にあることが多かった。また発話が伴うことが多いのは、前期と同様であった。

調査⑦～⑧回目（後期）では、少ない度数ではあるが、注意共有のある場面の方が、視線が対象児のみに向いており、機能は親和的で、身体の位置は対象児の前にあり、発話が伴うことが多かった。

以上より、注意共有のある場面では、いずれの時期も対象児との注意共有が成立しやすいような動きをする保育者の状況があったと考えられる。子どもとかかわるときには何を目的とするのかにより、そのかかわり方が異なるが、注意共有を伴うコミュニケーションな経験を促す際には保育者のかかわり方自体も考慮する必要性が示唆されたのではないだろうか。定型発達児であれば、大人のコミュニケーションな養育行動を引き出すような、子ども自身の能動的な行動が乳児期の頃からみられるが、ASD児ではそのような行動がなかなかみられない。だからこそ、周囲の大人の支持的な行動が必要である。このことは狗巻（2013）や榊原（2013）、吉川（2013）が述べてきたことと合致する。

5-3. 本研究のまとめと今後の課題

本研究では、前言語期の自閉症スペクトラム障害（ASD）幼児と保育者の身体接触を伴うコミュニケーションの特徴について、注意共有の有無と関連させて、一事例を縦断的に検討した。その結果、保育者の行動が変化の様子がみられた。まず一点目は、身体接触を伴うコミュニケーション行動について縦断的に検討した際に、量的な変化は確認できなかったが、保育者が始発した身体接触によるコミュニケーションに質的な変化があったことである。具体的には、調査開始頃には、促しや誘導をするような中立的な機能をもった身体接触が多くみられていたが、調査中盤頃より、対象児と向かい合って視線を合わせながら親和的な機能のある身体接触が多くみられるようになった。二点目は、注意

共有のある場合には、調査中のいずれの時期も対象児との注意共有が成立しやすいような動きをする保育者の状況があったことである。具体的には、全体の中では調査中盤以降に多くみられたような発話を伴い親和的な機能をもつ身体接触がみられていた。注意共有を伴うコミュニケーションな経験を促す際には、保育者のかかわり方自体も考慮する必要性が示唆されたといえる。

Meirsschautら（2011）によると、ASD幼児の母親は定型発達児の母親に比べて、養育者が主導するようなかかわりが多いという。本研究では、ASD幼児と保育者を対象にしたが、母親等の主となる養育者を対象に検討することも必要である。また結果から、注意共有のある場合には、保育者の発話が伴う身体接触が多くみられたことが明らかになったが、本研究では発話の内容を検討できていない。ASD幼児とのコミュニケーションの上で、大人からの発話も重要な要素である。発話についても、その機能や使用している語彙など、内容は多岐にわたるため、今後検討していく必要がある。前言語期という周囲の大人がとまどうことの多い時期に、ASD幼児とのコミュニケーションをどのように展開していくのかを具体的な行動から考察することは重要であり、今後も継続して検討していきたい。

6. 文献

- Bates, E., Camaioni, L., & Volterra, V. (1975). The acquisition of performatives prior to speech. *Merrill-Palmer Quarterly*, 21 (3), 205-226.
- Doussard-Roosevelt JA1, Joe CM, Bazhenova OV, Porges SW. (2003). Mother-child interaction in autistic and nonautistic children: characteristics of maternal approach behaviors and child social responses. *Developmental*

- Psychopathology, 15 (2), 277-295.
- 狗巻修司. (2013). 保育者のはたらきかけと自閉症幼児の反応の縦断的検討：共同注意の発達との関連から. 発達心理学研究, 24 (3), 295-307.
- Meirsschaut, M., Roeyers, H., Warreyn, P. (2011). The social interactive behaviour of young children with autism spectrum disorder and their mothers: Is there an effect of familiarity of the interaction partner?. Autism, 15 (1), 43-64.
- 森つくり・熊井正之. (2011). 注意欠陥/多動性障害が疑われる聴覚障害幼児への言語・コミュニケーション指導における認知・行動特性に配慮した工夫や働きかけ. 音声言語医学, 52 (1), 43-52.
- 榎原久直. (2013). 自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障害の発達の変容(2)：主体的能力・障害特性の変容と特定の他者との関連. 発達心理学研究, 24 (3), 273-283.
- 塚崎京子・無藤隆. (2004). 保育現場における3歳児の身体接触の変容. 乳幼児教育学研究, 13, 13-26.
- 柳澤亜希子. (2015). 自閉症のある幼児への包括的アプローチ. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 42, 1-11.
- 吉川知夫. (2013). 重度・重複障害児の相互交渉における視覚的注意の共有と大人の支持的行動. コミュニケーション障害学, 30, 1-8.

謝辞

本研究にご協力してくださったお子様とその保護者の方に心より感謝申し上げます。また長期にわたる観察を快く支えてくださった幼稚園の先生方に御礼申し上げます。